

学校名 かわぐち しりつはらまちしょうがっこう  
川口市立原町小学校

校長名 加 田 明

所在地 〒332-0024 埼玉県川口市飯原町 6-50

TEL 048-252-4761

FAX 048-252-7589

URL <http://www.sch.kawaguchi.saitama.jp/haramachi-e>

## 1 研究主題

「運動する楽しさやできる喜びを味わわせ、  
たくましさを育む教育の創造」

## 2 研究の期間

平成27年度～平成29年度 3年間

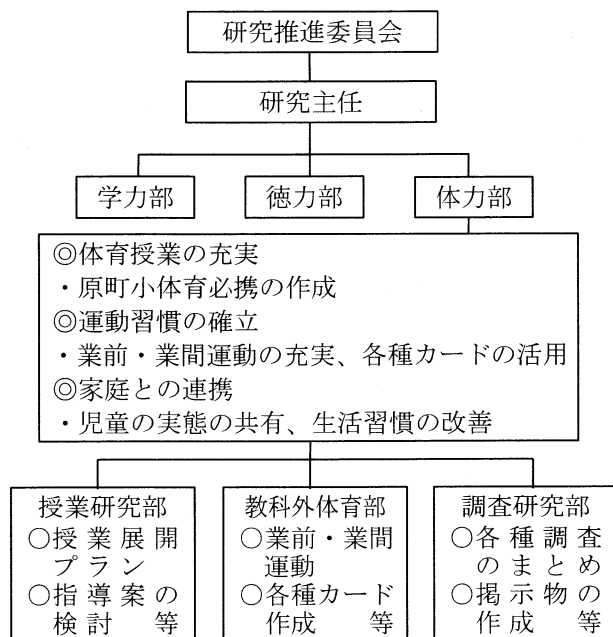
## 3 研究の目的

本校は、「なかよく かしこく たくましく」を学校教育目標とし、「知・徳・体の調和がとれた気力あふれる原町小学校」の実現に向け、日々教育活動に取り組んできた。しかし、平成27年度における新体力テストの総合評価は、A+B+C 71.7%、A+B 40.1%と低く、児童の運動習慣にも大きな課題が見られた。

そこで、本研究主題を「運動する楽しさやできる喜びを味わわせ、たくましさを育む教育の創造」とし、「たくましさ」を「自ら進んで運動に親しみ、粘り強く心身を鍛える力」と捉えた。そして、体育授業の充実と運動習慣の確立、家庭との連携を柱に、児童の体力向上に向けて、新体力テスト総合評価A+B+C 95%以上、A+B 80%以上という数値目標を掲げ、研究を進めた。

## 4 研究の方法・実践内容

### (1) 研究組織



### (2) 研究仮説

#### 仮説 1

運動の特性や魅力を味わわせ、自己の伸びを実感できる授業を展開することができれば、運動への意欲が高まり、たくましさを育むことができるだろう。

#### 仮説 2

仲間と豊かに関わり合う授業を展開することができれば、運動への意欲が高まり、たくましさを育むことができるだろう。

#### 仮説 3

運動の日常化を図り、体を動かすことの楽しさを味わわせることができれば、運動習慣が身に付き、たくましさを育むことができるだろう。

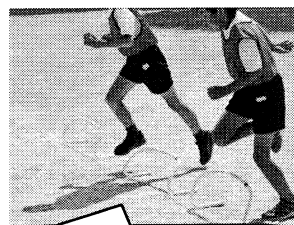
### (3) 体育授業の充実

#### ア 「原町小体育必携」の作成

全教職員の体育授業における共通理解を図るために、原町小体育必携を作成した。その中の一つとして、45分間の授業の流れと指導上の留意点を示した授業展開プランを作成し、学習規律を確立するとともに、本時のねらいに沿った授業を行い、体育授業の質の向上を図った。

#### イ 授業研究を中心とした仮説の検証

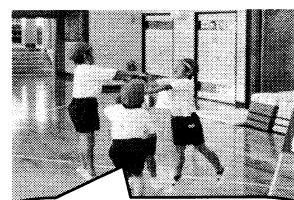
各学年の発達の段階や運動の特性に応じた手立てを講じ、仮説の検証を行った。



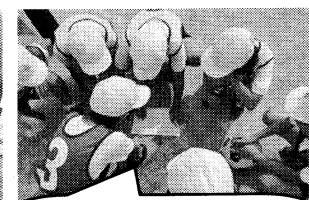
感覚づくりの運動の充実



自己の伸びの明確化



楽しさや喜びの共有



チーム間のアドバイス

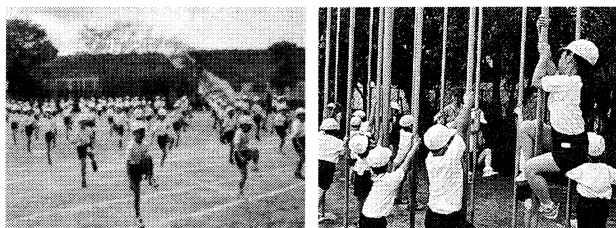
#### (4) 運動習慣の確立

##### ア 自校体操（原町体操）の取組

本校の課題であった「筋力」「敏捷性」「柔軟性」等をもつて運動を取り入れた「原町体操」を作成した。業間運動や体育授業の準備運動として、年間を通して行っている。

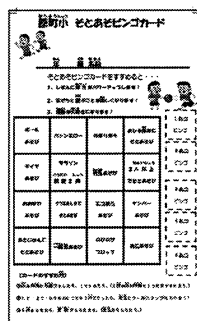
##### イ 業前・業間運動の取組

火・木曜日の業間25分間と、水曜日の業前15分間に、原町体操や課題となる体力の向上をねらった運動を行っている。



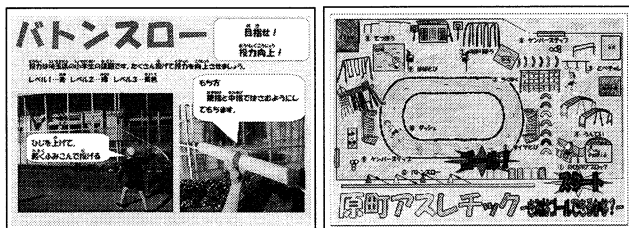
##### ウ 各種カードの活用

外遊びの習慣化を図ることをねらいとした「そとあそびンゴカード」や「マラソンカード」「なわとびカード」を活用し、目標をもって、日常的に運動に取り組む意欲を高めた。



##### エ 運動意欲を喚起する環境づくり

児童が進んで運動したくなるような環境を校庭につくり、遊び方も紹介した。



#### (5) 家庭との連携

##### ア 生活習慣チェックシートの活用

規則正しい生活習慣を身に付けることができるように、毎月末に家庭に持ち帰って振り返り、生活習慣の改善に努めた。

##### イ 体力のびのびカードの取組

「柔軟性」「筋力」「平衡性」の向上と運動の日常化を図るために、家庭の協力を得て、毎日取り組めるようにした。

##### ウ 体育だよりの発行

児童の体力や生活習慣の実態、学校で行っている体力向上の取組等を伝えたり、家庭でできる運動を紹介したりした。

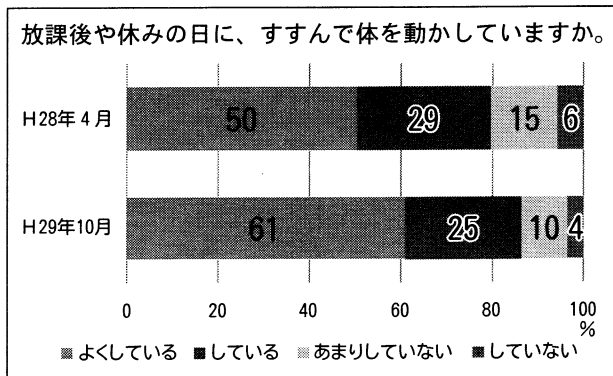
#### 5 研究の成果

##### (1) 運動の特性や魅力を味わわせ、自己の伸びを感じられるように手立てを講じてきたこと

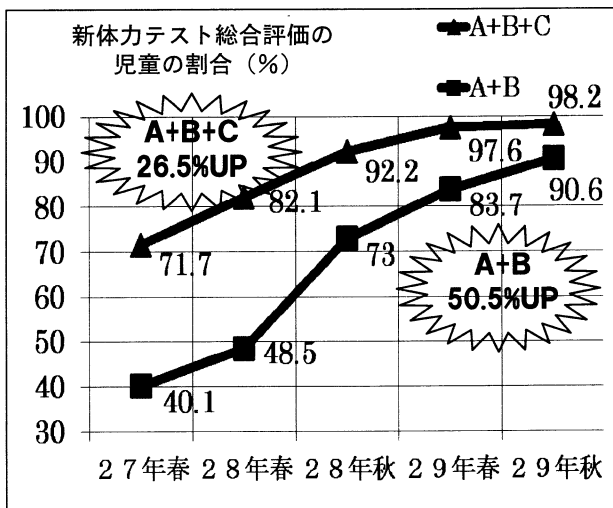
で、「運動が好き」「体育の授業が楽しい」と感じる児童が増えた。

(2) 児童相互の励まし合いや教え合いの機会を設けたことで、仲間との関わりが深まり、それが自己の伸びの実感にもつながった。

(3) 体育的諸活動や運動したくなる環境を充実させ、家庭と連携して運動の日常化に取り組んできたことにより、運動習慣が改善された。



上記の成果が、児童の体力向上につながった。



#### 6 研究の意義、発展性

日常的な身体活動の減少や運動をする児童とそうでない児童の二極化は、全国的にも課題となっている。研究当初、本校の児童にも同様の傾向が見られ、体力向上は必須の課題であった。この3年間で上記の結果を出せたのは、体育授業の充実と運動習慣の確立、家庭との連携といった3つの柱で、組織的にバランスよく研究を進めた成果であると考えられる。特に、体育授業の質を高め、日々の運動機会を効果的に設定することで、児童の運動意欲を高めることができた。そして、学校と家庭とで児童の体力や生活習慣の課題を共有し、家庭の協力を得ることができたのも、児童の体力向上に大きくつながった。

今後も、これまでの体力向上の取組を、児童の実態に合わせて工夫・改善し、本校の教育活動として定着させていきたい。